広報 九州

平成29年6月10日
（2017年）

No　1744

九州森林管理局
〒860-0081
熊本市西区京町本丁2－7
IP電話：050-3160-6600（代表）
http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/

林業生産管理勉強会を開催

～林業労働力の確保・生産性向上等課題解決に向けて～

開催にあたり挨拶を行う池田局長

九州では、戦後造成したスギ・ヒノキ人工林が主伐期を迎え、資源の充実とともにバイオマス発電や海外輸出など需要が拡大する中で、九州森林管理局においても主伐や、森林整備に伴う間伐などの事業量が増加傾向にあることから、今後、林業労働力の確保や生産性向上が重要な課題となっています。

このため、局内に林業事業体及び関係職員の生産管理意識の向上などを目的とした「林業事業体育成プロジェクトチーム」を設置、各種研修の開催や情報の共有を図ることとしています。

その取り組みの一環として、5月11日、九州管内の林業事業体、各県職員、局署の関係職員計150人を対象に「林業生産管理勉強会」を開きました。

冒頭、九州森林管理局池田直弥局長より「九州はどこよりも早く主伐期を迎え需要も拡大。一方、林業労働力の不足、生産性の向上や作業の効率化、低コスト化は喫緊の課題」との挨拶があり、九州局田口護次長から林業事業体の育成に向けた取り組みなどの説明がありました。

続いて、鹿児島大学農学部の岡勝教授より「生産性向上のための作業改善の考え方」として、作業日報から生産性を把握する方法、作業システムの改善やコスト計算の方法などについての説明と、京都大学フィールド科学教育センターの長谷川尚史准教授より「作業システムの評価と生産管理」として、作業システムの評価手法、生産コスト改善のノウハウ及び生産管理における新技術などについて説明を受けました。

講師の説明を聞く参加者

また、鹿児島県森林技術総合センター普及指導部の外山裕二部長より「優良事例とフォレスターの役割」として、各研修を通した人材育成の活動、及び鹿児島県のフォレスターの活動についての紹介、続いて南那珂森林組合串間事業所第2事業課の清水賢次課長より「南那珂森林組合における生産管理の取組」として、当組合で実施している生産管理の手法などについて紹介がありました。

なお、翌日には、局署関係職員のみを対象として、森林整備事業における作業日報の管理手法などについて勉強会を行い2日間の日程を終了しました。

今回の勉強会に参加して頂いた林業事業体の方々には、生産性向上及びコスト削減に向けた作業システムの見直しなどについて、改めて考えて頂く契機となることを期待するとともに、局署などにおいては、発注事業を通して、林業事業体などが自ら行う生産性向上に向けた取り組みを支援していくこととしています。

（担当＝資源活用課
技術普及課）

150人が参加した勉強会の様子

菊池渓谷の現状を報道陣へ公開

5月1日、「菊池渓谷を美しくする保護管理協議会」は、昨年4月の熊本地震により被害を受け立ち入り規制が続く菊池渓谷を報道機関に公開しました。

菊池渓谷は、レクリエーションの森に設定されており、日本名水百選や水源の森百選などに指定され、天然性広葉樹林や渓谷美の自然探勝に県内外から年間20数万人が訪れる観光地で、再開時期に関しての問い合わせが多いことから、復旧状況・現状をお知らせするため報道機関へ公開したものです。

当日は、事前に申込みのあった、テレビ・新聞などの報道機関13社をはじめ、熊本県、菊池市及び協議会、熊本森林管理署の職員など約30人が参加しました。

報道陣へ説明する森署長

報道陣は、渓谷内の歩道を歩きながら、被害箇所の復旧状況・現状などについて復旧工事の実行機関からの説明を受け、特に被害の大きかった菊池渓谷上流の「広河原」付近の大規模崩落箇所（高さ約120㍍、幅約30㍍）においては、急傾斜地での工事の大変さ、今後の工事予定などについて説明があり、報道陣は、復旧工事によりこれまでと変わらない美しい渓谷となっていることに安心した様子でした。

報道陣からは「入谷再開の時期」「県道の復旧時期」などについて質問が相次ぐとともに、当日夕方のテレビ放映、翌日の新聞掲載など、菊池渓谷再開への関心の高さがうかがえました。

九州森林管理局及び熊本森林管理署においては、菊池渓谷の一日も早い再開に向け熊本県、菊池市、協議会などと連携を図りながら、復旧への更なる取り組みを進めていくこととしています。

（担当＝総務課広報）

イベントで国有林PR

【宮崎森林管理署】 5月13日、宮崎市内「生目の杜運動公園」において、農林水産物の地場産品を広く紹介する「食フェスタinみやざき2017」（食フェスタ.inみやざき実行委員会主催）が開かれました。

当署からは、恒例の木工体験（木製キーホルダー「もっくん」・表札づくり）と、昨年から取り入れているクイズ形式の森林教室及びオリジナル絵はがきの配布に加え、今年は昆虫の切り絵（職員が即興で作成）の実演や、林野庁のパンフレット（九州の国有林・入庁案内）の配布を行い、積極的に国有林のPRを行いました。

大盛況の宮崎署ブース

イベント当日は、多くの親子連れが訪れ、子供たちは目を輝かせながら木工体験などに取り組んでいました。

なかには、ご夫婦で木工体験に参加されるなど、工作部材が途中で不足するほど盛況となりました。

また、林野庁のパンフレットを手にした方から、職員が質問を受ける場面があるなど、このイベントを通して、幅広い年代の方に森林や木材、林野庁の仕事に興味を持っていただくことができ、森林管理署をより身近に感じていただける貴重な一日となりました。

桜島地区で防災点検

【鹿児島森林管理署】 2017年度の鹿児島市防災点検が行われ、松永範芳、松山芳英両副市長の外、関係機関の担当者総勢16人が参加し、桜島地区民有林直轄治山事業の現場を視察・点検しました。

この防災点検は、梅雨時期を前に災害発生の恐れがある箇所や、防災のための整備現場について、毎年、市長及び副市長による防災点検を実施しているもので、今回は、桜島地区民有林直轄治山事業の松浦川第2支流の現場において実施されました。

冒頭、中西誠鹿児島森林管理署長の挨拶の後、古庄誠司総括治山技術官より、桜島地区民有林直轄治山事業のこれまでの経緯や今年度の計画について説明を行いました。

現地で説明を行う職員

参加者からは「治山ダムに溜まった土砂は排土しないのか」「土石流の発生回数は減少しているのか」また、副市長からは、昨年の警戒レベル引上げに伴う現場での対応などについての質問があり、署長及び総括から質問に対する回答と説明を行いました。

また、治山ダムの着色を緑色にした方がよいのではないかとの提案があり、緑色では冬期においては周りの色彩と違和感が出てくる旨の説明を行い、納得していただいたところです。

最後に、副市長からこれまでの治山対策へのお礼の言葉があり防災点検を終了しました。

植栽等の研修会開催

【屋久島森林管理署】 4月26日、当署春牧森林事務所部内、太忠嶽国有林の分収造林伐採跡地において、屋久島林業推進検討会（事務局：鹿児島県屋久島事務所）主催により、ヤクスギ苗木の植栽及びシカ防護ネット架設の研修会が開かれ、当署、県、屋久島町、島内の林業事業体、苗木生産業者の総勢35人が参加しました。

この研修会は、屋久島における人工林植栽が実に14年ぶりに実施されることから、島内の林業事業体関係者などからの要請に基づき、これからの屋久島における主伐・再造林を進めていくため、島内の関係者が一堂に会して開いたものです。

挨拶を行う川畑署長

冒頭、川畑充郎屋久島森林管理署長から「人工林が本格的な利用期を迎える中で、屋久島は離島と言うハンディを抱えていますが、本日ご参集の皆さんがこれからの屋久島林業を切り開いていくメンバーであり、屋久島の林業が未来に繋がるようにお互い知恵を出し合っていきましょう」との挨拶がありました。

続いて、当署職員から地拵えと植栽方法の説明を受けたのち参加者全員で、ヤクスギの普通苗とポット苗１００本を植栽しました。

参加者の中には、久しぶりの屋久島内での人工林植栽ということで植栽経験の浅い方もおられたことから、植栽技術の向上にも繋がりました。

また、シカ防護ネット架設では、当署職員及び請負事業体の現場代理人から、ネットの規格や作業手順などについて説明を受けました。

屋久島は、シカによる農林業被害が依然として多いことから、シカの個体数調整とネットなどの被害防止対策の重要性を認識してもらいました。

今回の研修会は国有林内で開催されましたが、民有林においても森林資源が充実してきており、当署としては地域関係者のニーズを把握し連携しながら、引き続き研修会の開催やフィールドの提供を行い、屋久島林業の技術向上に取り組んで参ります。

植栽方法等の説明を受ける参加者

モニターの声

坂井 真唯 さん

木はいつも身近な存在

私が国有林モニターに応募した理由は、元々森林そのものに興味があり、森林の中でも特別な国有林について学ぶ・知る機会がなかなかないため、国有林について学ぶいい機会であると感じたからです。また、長崎・九州の国有林の現状を詳しく知ることができ、森林についての理解をより一層深めることが出来るため、この制度に応募しました。

国有林モニターになったからには、国有林や森林に関して知識を増やし、しっかりと意見を述べられるようにモニターとしての役割を果たしていきたいと考えております。

私が森林に興味を持ったきっかけは2つあります。

1つ目は実家の方も、現在居住している長崎でも、山や森林はいつも身近な存在であることです。どちらも山に囲まれた地形であり、山や森林からは美味しい水や登山、美しい風景など多くの恩恵を受けています。森林が身近であるからこそ、森林に興味を持ち、次世代へこの自然を受け継いでいきたいと感じました。

2つ目は中学の時に理科の教科書の最後のページに掲載されていた、ドイツでの森林が枯れた写真でした。あの写真を見て衝撃を受けました。人間によってこんなにも自然が破壊されるのかと驚きました。

しかし、世の中には人間の手が入らなければ、維持することが難しい自然も多くあります。その代表例が人工林であると思います。人による管理がきちんとなされないと、低層の植物が育たず、土砂崩れなどの災害へと繋がってしまいます。現在、林業では後継者不足が深刻であると言われています。まずこの国有林モニターで林業の現状を把握し、どういった取り組みがされているのか、林業についての理解を深めたいと考えています。

1年間という時間の中で、森林に対する知識を出来るだけ多く得ていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

（長崎県長崎市在住）

春の照葉樹林散策ロングウォーキング開催

～新緑輝く綾の森を堪能～

綾の照葉樹林プロジェクト（略称：綾プロ）連携会議主催「春の照葉樹林散策ロングウォーク」が5月20日、綾の森が最も輝くこの時期に行われ、親子連れなど14人が参加しました。

当日は天候にも恵まれ、晴天の空の下、参加者は綾町・上畑公民館に集まり、開会式が行われました。

開会式では、主催者を代表して宮崎森林管理署冨永雄二次長が挨拶を行い、その後、スタート地点の「照葉大吊橋」に移動し、九州森林管理局山﨑準計画課長による、綾の照葉樹林及び綾プロの紹介のあと、参加者は3班に分かれスタートしました。

照葉大吊橋からスタートする参加者

ガイドの説明を聞きながらちょっと休憩

今回のコースは、約9キロと7キロのコースがあり、各班それぞれにガイドが同行し、随所で樹木や草花についての説明を行い、参加者は熱心に聞き入っていました。

スタートから約3時間後に、ゴール地点の上畑公民館に全員元気に到着、参加者からは「とても楽しかった」「新緑の中を歩き、気持ちよかった」などの声が聞かれ、輝く綾の森を堪能したイベントとなりました。

（担当＝計画課）

林業遺産に認定

【屋久島森林管理署】当署管内の国有林内にある、森林鉄道や事業所、宿舎・小中学校跡や屋久島の林業を記録した古写真集が、２０１６年度の林業遺産「屋久島の林業集落跡及び森林鉄道跡」として認定されました。

この林業遺産は、日本森林学会が、日本各地の林業発展の歴史を将来にわたって記憶・記録するための試みとして、13年度から選定事業を実施しているもので、各年度ごとに林業発展の歴史を示す景観・施設・跡地などを中心に、体系的な技術、特徴的な道具類、古文書などの資料群を林業遺産として認定しています。

当署としては屋久島森林生態系保全センターと合同で、遺産認定についての情報共有や、今後の対応方針などについて署内関係者で勉強会を開催するとともに、国立歴史民俗博物館の柴崎茂光准教授や鹿児島大学の奥山洋一郎助教の指導を受けて現地検討会を開きました。

署内勉強会の様子

今回の認定に関して、屋久島は縄文杉を始めとする貴重な森林生態系が世界自然遺産として認定され、大切に保全されていることに加え、過去から屋久島の生活や経済を支えてきた林業関係の施設跡などにも、違う角度からスポットが当てられ、屋久島林業史を物語る貴重なものが林業遺産に認定されたことは、非常に喜ばしいことであると考えています。

当署としては、今後とも関係機関や研究者と連携しながら、今回認定された林業遺産を適切に保全して、後世にその価値が受け継がれていくように努めていく考えです。

「まふのわ」へ掲載

5月22日、農林水産省の発行する省内報「まふのわ」の取材が行われ、当局治山課の職員がインタビューを受けました。

今回の取材は、昨年の熊本地震から1年が経過し、震災復旧に取り組む職員の様子や業務について、全国の職員にお知らせするために行われ、大臣官房広報評価課広報室より2人の職員が来局しました。

インタビューでは、山下和也治山課長をはじめ治山課の職員が「震災から1年経過して、現場の声や変化を教えて下さい」「復興に向けた今後の課題は」などの質問に対し、時折笑顔も出る中丁寧な回答を行い、和やかな雰囲気でインタビューが進みました。

このインタビューの模様は、6月発行の「まふのわ」に掲載が予定されていますので、職員の皆様におかれてはぜひともご覧下さい。

（担当＝総務課広報）

インタビューの模様

地元説明会を開催

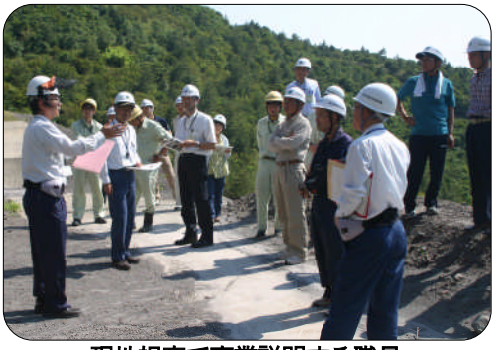
【鹿児島森林管理署】２０１７年度桜島地区民有林直轄治山事業の地元説明会を、地元自治公民館長並びに関係機関総勢30人参加の下、鹿児島市桜島支所及び現地において開きました。

まずはじめに、鹿児島森林管理署中西誠署長より、円滑な桜島地区民有林直轄治山事業の推進に対し、お礼の言葉があり、その後、古庄誠司総括治山技術官より、これまでの進捗状況や今年度の事業計画について、パワーポイントを使用して説明を行いました。

意見交換では「流域における国土交通省との棲み分け」「一般市民への周知方法としてＡ４版を作成してほしい」「治山対策はあと何年やるのか」また、道路の維持管理への要望と併せて、維持補修への早急な対応に対し感謝の言葉があり、今後、桜島地区民有林直轄治山事業を進めるに当たり貴重なご意見をいただきました。

会議終了後、引の平上流、長谷川、松浦川第２支流と現地を視察しましたが、特に、引の平上流では円形セルダムの規模の大きさに一様に驚かれており、「このような施設を見ると下流住民は安心しますね」「機会があったらまたきたいです」などの感想があり、治山事業を担当する者として、達成感と責任感を改めて感じる一日となりました。

今後も、このような機会を捉え、積極的に治山事業をＰＲしていくこととしています。



現地視察で事業説明する職員

労働災害防止に向けて

【熊本森林管理署】４月26日、菊池市社会福祉協議会本所会議室において、請負事業実行中の事業体などを対象に、安全会議を開きました。

当署においては、年度当初より災害が連続し、これから本格的な事業発注を進めるに当たり、安全会議を開いたもので、事業体など10社から23人が参加しました。

１０社が参加した安全会議

冒頭、熊本森林管理署森勇二署長から、今年度の災害概要に触れ「これ以上、熊本森林管理署から災害を出さないよう、より一層安全対策を徹底していただきたい」との挨拶があり、続いて九州森林管理局資源活用課西栄二課長から「作業手順を遵守し、ヒューマンエラーによる災害をなくすことが重要である」旨の挨拶がありました。

会議では、労働災害の現況及び未然防止に向けた対策などについて説明した後、各社の代表者から、現在取り組んでいる安全対策について発表・意見交換を行い、今後の労働災害防止に向けた自社の取り組みへの参考となる安全会議となりました。

最後に、安全を祈念し、安全唱和「ゼロ災でいこう。ヨシ！」で締めくくり、決意を新たに閉会しました。

平成29年度 山地災害防止キャンペーン

林野庁では、平成29年5月20日から6月30日までの期間、「山地災害に備える」を合い言葉に、「山地災害防止キャンペーン」を実施しています。

九州森林管理局においては、この期間中、地域住民の防災意識の高揚に資することを目的として、関係機関や地域住民の皆様などのご理解・ご協力を得ながら、山地災害危険地区の周知やパトロールなどを実施しています。（担当：治山課）

人のうごき

☆6月1日付発令

大分署治山技術官

平山有希子【林野庁】

（担当＝総務課）

地域林政対談を開催

【屋久島森林管理署】5月24日、当署会議室において「地域林政対談in屋久島」を開きました。

この対談は、九州森林管理局長・各森林管理署長が市町村の首長と地域で直面している具体的な林政課題などについて情報交換し、対談後に署と市町村の間で情報共有などに向けて協定を締結することを目的に、九州局管内の全署で開いているものです。

当日は、屋久島町から荒木耕治町長、鹿児島県屋久島事務所から赤間広嗣所長、井口寿郎農林普及課長が出席され、局・署より池田直弥局長、勝沼太志企画調整課長、川畑充郎署長、古市真二郎所長ほか各機関の担当者が出席しました。

対談にあたり挨拶する池田局長

まず、それぞれの機関から本年度の重点取組事項などについて話題提供があり、その後「今後の屋久島林業の展望」と題して、人工林材の需要拡大の取組、今後の育林に向けた取組、ヤクシカ被害対策などについて、活発な意見交換を行いました。

荒木町長からは「屋久島は林業の島であり、林業が基幹産業になるように再生したい。森林管理署とは昔から一体であり、切っても切れない縁があるので引き続き協力をお願いする」との要請に対して、池田局長から「今後とも地元のご意見などを聞きながら、町、県などと密接に連携しながら対応するので、屋久島署・保全センターに気兼ねなく相談してほしい」と話され、有意義な対談となりました。

今回の対談を受けて、屋久島町との間で異常箇所などの確認・情報共有、災害発生時の支え合い、森づくりのための協力などについて協定を締結することとなりましたが、当署としては引き続き管内の他の市町とも密接に連携しながら、地域貢献するための国有林の管理経営と、地域の林政課題に積極的に取り組んでいく考えです。

活発な意見交換が行われる

都会の中の憩いの森

監物台樹木園の多様な植物 ⑮ アベマキ（ブナ科）

アベマキの名前の由来は何だと思いますか。コルク質が発達して幹の表面が人の顔のアバタに似ているとして、自生の多い岡山県の方言アバタ＝アベが使われたそうです。

葉や幹を見るとクヌギと非常によく似ています。しかしながら葉裏の観察をすると、アベマキは小星状毛が密生して灰白色となっており、クヌギは無毛で緑色となっているので判別することができます。

コルク質が発達することからワインなどの栓に利用すると考えがちですが、ワインの栓に使用されているコルクは、地中海沿岸に生育するコルクカシから採取したものです。戦中、戦後のしばらくの間は、アベマキのコルク質部分を砕いてのりで固めて使用したことはありますが現在は使われていません。

堅果は2年目に熟しほぼ球形で多数の線形の長鱗片がありません。上側は外側に反り返り、堅果（ドングリ）は総苞から半分抜き出でています。

みどりの散歩路

暑くなってきました、連日の夏日・真夏日で、熱中症により病院へ救急搬送される方も出てきたようです▼全国各地で真夏日を観測した、5月20、21日の2日間だけで700人以上の方が熱中症で搬送されたそうです▼今年の夏もまた暑くなりそうで、気象庁の6～8月の3カ月予報でも気温は平年より高く、降水量も平年並みか多くなるとのことで、熱中症や大雨に注意を呼びかけています▼昨年は、地震の後の豪雨により被害が拡大するなど、雨の影響も大きかったところですが、今年も大雨が続くとなると、復旧・復興事業への影響が気になるところです▼大雨の影響が気になるといえば、大分県豊後大野市の「地割れ」も、大雨で地下水の水位が上がり、地下で「地滑り」が起こった可能性を指摘されていて、今後梅雨の大雨への警戒が必要とのことです▼地震や地滑りなどの自然災害は、その後の対策に時間を要する場合が多く、地割れにより避難された方の「いつ終わるのか分からないのがつらい」という言葉が胸に刺さりました。（て）